# 幼児期の「言葉による伝え合い」を中心とした小学校との接続に関する研究動向

A Review of Research regarding connection with elementary schools centered on verbal communication in early childhood

金子　幸　　藤本　朋美　　牛島　豊広　　竹下　徹
（南九州大学）

キーワード：言葉による伝え合い、幼保小接続、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

## 1．はじめに

2017年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（3法令）が改訂され、この3法令すべてに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記された。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは、幼稚園教育要領によると、5領域に「示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである」[1)]と記されている。また、幼稚園教育要領解説によると、「小学校の教師と『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手掛かりに子供の姿を共有するなど、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが大切である」[2)]や「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は、幼稚園教育を通した幼児の成長を幼稚園教育関係者以外にも、分かりやすく伝えることにも資するもの」[3)]と記されている。さらに、2017年に告示された小学校学習指導要領においても、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」[4)]と明記されており、小学校学習指導要領解説総則編では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに幼稚園の教師等と子供の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である」[5)]と記してある。このことから、小学校教諭にも幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に対する理解を求めていることが分かる。したがって、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼保小接続の観点から重要な意味を持つものであると言える。

幼保小接続に関しては、これまでも小学校学習指導要領解説生活編において、スタートカリキュラムの編成について明記されるなど、その重要性が謳われてきた。スタートカリキュラムとは、「小学校へ入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」[6)]である。スタートカリキュラムについて、2008年の小学校学習指導要領解説生活編では、「学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした」[7)]と示すにとどまっていたが、2017年に告示された現行の小学校学習指導要領生活編では、「入学当初は、幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと育ちを踏まえて、児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくることが求められる。それがスタートカリキュラムであり、幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続する重要な役割を担っている」[8)]と示されており、幼保小接続に対する重要性はより高まっていると言える。しかし、幼保小連携・接続が実施されている自治体の割合は31.7％であり、年数回の授業、行事、研究会などの交流はあるが、接続を見通したカリキュラムの編成・実施は行われていない自治体の割合が37.6％、実施予定や計画がないまたは検討中の自治体の割合が21.7％と幼保小の接続に対して十分な対応がなされているとは言い難いのが現状である[9)]。

このような中、2021年に、中央教育審議会初等中等教育分科会の下に、幼児教育の質の向上及び幼保小の円滑な接続について専門的な調査審議を行うための「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され、目指す方向性として、2022年度から「幼保小の架け橋プログラム」の実施等が示された[10)]。幼保小の架け橋プログラムでは、「幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムとスタートカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育（低学年）の

関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進」[11] すること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かしていくことができる手立てを普及」[12] することなどが、ねらいとして掲げられている。これらのことからも、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりにした幼保小接続カリキュラムの計画・実施がますます求められると考えられる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、10の項目で構成されている。幼稚園教育要領解説では、当然ながらすべての項目で、小学校生活との関連が述べられているが、その中でも「言葉による伝え合い」に関しては、「特に、戸惑いが多い入学時に自分の思いや考えを言葉で表せることは、初めて出会う教師や友達と新たな人間関係を築く上でも大きな助けとなる」[13] と述べられており、10の項目の中で、唯一「入学時」について触れられている項目である。また、言語能力が育つことは、社会性・道徳性の育成にもつながり、ますます友達と積極的に関わろうとする意欲を生み出すと言われている[14]。さらに、小学校教育との接続に当たっての留意事項において、「共に協力して目標を目指すということにおいては、幼児期の教育から見られるものであり、小学校教育へとつながっていくものであることから、幼稚園生活の中で協同して遊ぶ経験を重ねることも大切である」[15] と示されている。このことからも、言葉による伝え合いが十分に保障されている保育活動は、友達との関わりも積極的となり、協同して遊ぶ経験が豊かになると考えられるため、言葉による伝え合いと幼保小接続は特に関連性が高いと言えるのではないかと考える。

以上のことから、本研究では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つである「言葉による伝え合い」を中心にした幼保小接続について、これまでの研究動向を探り、新たな研究課題を明らかにすることを目的とする。

## 2．研究方法

本研究では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の1つである「言葉による伝え合い」と幼保小接続に関する研究動向を概観するために、次の手順で文献を収集した。第1に、国立情報学研究所（NII）のCiNii Researchを利用し、「言葉による伝え合い」を含むタイトルで検索したところ、22件が該当した。第2に、この中から、論文に絞って検索をし直したところ、19件となった。さらに、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が幼稚園教育要領に示された2017年以降に発表され、かつ、学術雑誌掲載論文に注目したところ、9件となった。この9件の文献について、研究内容を精査した。

なお、参考・引用する先行研究は出典を明記することで、著作権を侵害しないよう留意し、文意を損なわないように努めた。

## 3．結果

本研究で調査対象とした文献について研究内容を精査した結果、①実践研究、②文献整理、③アンケート調査の3つに分類した（表1参照）。

### 1）小学校との接続の関連

調査対象とした9件の文献のうち、小学校との接続に関して述べられている文献は6件であった。そのうち、古金（2018）と太田（2020）の2件は、幼児期の終わりまでに育ってほし姿が小学校への接続を意識していること[16]、2017年の幼稚園教育要領の改訂が小学校への接続が意識された内容になっていること[17] への指摘について述べており、小学校との接続については、直接研究内容に反映されていない。

渡邉（2020）は、幼児の言葉による伝え合いの姿の基盤について、また言葉による伝え合いが育つ過程を明らかにすることを目的にしており、小学校との接続について論じることは目的としていないが、言葉による伝え合いが育つ過程で経験する活動が小学校教育に引き継がれ、小学校での授業を成り立たせる力になることを指摘している[18]。

小学校との接続の関連を研究目的に含んでいた文献は、3件であり、文献調査をしている廣川（2019）は、改訂された幼稚園教育要領の領域「言葉」と小学校の国語科の教科書教材との関連を分析し、小学校との接続の様相を明らかにすることを目的としている[19]。また、同じく文献調査をしている片山他（2020）は、幼児教育の「振り返り」の活動に着目し、「振り返り」がもつ意義と教師の専門性について、言語力の育成及び幼小接続の観点から論考することを目的としている[20]。

実践研究を行った高橋他（2020）は、小学校学習指導要領の国語科の在り方を確認したうえで、就学期以降の子ども達の育ちを支えられる保育活動のうち、言葉の側面に注目した保育活動の考察を行うことを目的にし、言語表現活動と造形表現活動を繋いだ保育活動における幼児の会話の流れを分析している[21]。

### 2）調査対象文献の研究内容

#### 2-1）実践研究における「言葉による伝え合い」活動

古金（2018）は、科学絵本の読み聞かせと体験を組

表1　調査対象文献一覧

| No | 著者名 | 発表年 | タイトル | 収録刊行物 |
|---|---|---|---|---|
| ①実践研究 | | | | |
| 1 | 古金悦子 | 2018 | 絵本を基点とした生命科学教育プログラムにおける「言葉による伝え合い」についての考察：保育内容「言葉」の領域から | 松蔭大学紀要 |
| 2 | 渡邉輝美 | 2020 | 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「言葉による伝え合い」についての一考察 | 初等教育：教育と実践（別府大学短期大学部初等教育科・保育課児童学会） |
| 3 | 高橋一夫他 | 2020 | 幼児同士の言葉による伝え合いを誘発する保育活動：素話から描画活動に繋ぐ保育活動における幼児の発話に注目して | 神戸親和女子大学児童教育学研究 |
| 4 | 河野共芳他 | 2021 | 幼児期の言葉による伝え合い：話し合い活動の実際 | 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 |
| 5 | 吉村真理子他 | 2022 | 言葉による伝え合いから生まれる共感的理解：『ずーっと ずっと だいすきだよ』『きつねのおきゃくさま』読み語りの実践報告 | 千葉敬愛短期大学紀要 |
| ②文献整理 | | | | |
| 6 | 廣川加代子 | 2019 | 領域「言葉」と小学校「国語科」の連続性の考察：言葉による伝え合いの視点から | 新渡戸文化短期大学学術雑誌 |
| 7 | 太田顕子 | 2020 | 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿『言葉による伝え合い』に関する一考察 | 関西福祉科学大学紀要 |
| 8 | 片山美香他 | 2020 | 幼稚園における「言葉による伝え合い」の力を育む「振り返り」の時間の意義と課題 | 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 |
| ③アンケート調査 | | | | |
| 9 | 杉本栄子 | 2021 | 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「言葉による伝え合い」の一考察：幼児のコミュニケーション能力を高め、自分の思いを伝える力の育ちを促す活動を探る | びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要 |

み合わせた活動から、幼児の言葉による伝え合いについて分析を行っている。古金によると、「科学絵本を基に観察や体験活動を組み合わせたことで子供たちが気づいたことや分かったことをつぶやいたり、発表したりする機会が多く持たれた」ことを明らかにしており、さらに、「科学絵本を基にした問いかけにおいて子供の『言葉』を引き出すためには、観察の視点を絞って問いかけることが有効である」[22] と示唆している。

渡邉（2020）は、言葉による伝え合いに関する事例を「話す」「聞く」「伝え合う」の３つの視点から分析している。「話す」視点では、安心して話せる相手がいること、表現を生み出す体験が展開されていることが必要であることを指摘しており、「聞く」視点では、保育者が幼児と幼児の「中継者」としての役割を果たすこと、「伝え合う」視点では、中継者としての役割の他に、幼児が自分の思いを友達に伝えられる場を設定する「交通整理者」や「司会者」の役割をすることも必要であると述べている[23]。

高橋他（2020）は、言葉による伝え合いが誘発されるような保育活動として、言語表現活動（素話）と造形表現活動（描画）を繋げた保育活動を提案し、実践を行っている。その結果、造形表現活動において幼児同士の会話が誘発されていることを明らかにしている。高橋らは、その結果を「他者の描画と自身の描画に差異が見られた場合に疑問を持つ」ことや、「自身のアイディアを他者に知ってほしいという気持ち」の高まりが発話への大きな原動力となったからだと考察している[24]。

河野他（2021）は、話し合いの活動場面を「伝える」「受け入れる」「共有する」の３つの視点から考察を行っている。河野らは、最初は上手くできない話し合いも教師が代わりに伝えたり、司会者となったりすることで、子ども達が少しずつ話し合いの進め方の力を身につけていくことができると述べている[25]。

吉村他（2022）は、絵本の読み語りとその後の問いかけを通して、子どもたち同士の言葉による伝え合いを引き出していくなかで子どもたちの役割取得能力を高めることを目的に実践している。吉村らは、絵本の読み語り後に「担任が話し始めると、自分の気持ちや考えを自分の言葉で伝えようとする姿が予想以上に多く見られ、言葉による伝え合いができている」ことや、「自分の思いが伝わった喜びを感じていた」子どもの姿を考察している。さらに、発言をしていない子どもも友達同士のやり取りを聞きながら心を動かされている様子があり、園での読み語りという集団体験の効用であると指摘している[26]。

### 2-2）文献整理における幼保小接続

廣川（2019）は、幼稚園教育要領の領域「言葉」の

内容と小学校国語科の教科書教材との関連を分析しており、1・2年生の「話すこと・聞くこと」教材の学習内容に領域「言葉」の内容が確かに連続していると言えることを明らかにしている。しかし、同時に領域「言葉」の「してほしいことを言葉で表現」することに関しては、小学校国語科に連続せずに途絶えてしまう内容であることも明らかにしている[27)]。

太田（2020）は、言葉による伝え合いの実践を通して、領域「言葉」に示す言葉の習得を達成するための教師の役割について分析を行っている。太田は、「言葉による伝え合い」の育ちは、心が揺さぶられる体験を通じ培われるものであるため、教師がそのような体験の場を保障すること、幼児が自分の思いを躊躇することなく出せる環境をつくることが大切であると指摘している[28)]。

片山他（2020）は、「振り返り」の時間で行われる言葉による伝え合いについて、設定保育後に行う振り返りと降園前の振り返りの違いを示している。2つの振り返りの時間がもたらす違いとして、設定保育後の振り返りでは、全員が同じ経験をしていることで、友達の発言の状況や場面が比較的想像しやすく、共感したり、異なる考えを述べたりする姿が引き出されるが、降園前の振り返りでは、同じ場にいなかった幼児にも状況が共有できるように、説明する力が必要になることであるとしている。また、幼児にとって「振り返り」を経験する意義について、「幼児自身が以前の自分を振り返り（想起し）、今の自分との違いや気付かなかったことに気付いたことを自覚すること」、「幼児が次の活動への期待や意欲、目的を持つための契機と成り得ること」であるとしている。さらに、「『振り返り』の場で用いる『言葉による伝え合い』に必要な会話スキルや、思考力や表現力、今後の見通しや目的を見いだす力は『学びに向かう力』として、小学校での生活や学習に繋がる姿とみなせる」と言葉による伝え合いの活動が小学校との接続に必要な力となることを指摘している[29)]。

### 2-3）保育者と学生へのアンケート調査

杉本（2021）は、自分の想いを伝える力の育ちを促す活動を明らかにするため、保育者と学生へアンケート調査を実施した結果、日常生活における保育者と子どもとの信頼関係の重要性や遊びの充実が豊かな言葉の表現につながることを明らかにしている[30)]。

### 3）「言葉による伝え合い」活動と小学校教育との接続

小学校との接続を研究の目的としていた3件の文献から「言葉による伝え合い」活動と小学校教育との接続について明らかになったことをまとめる。

廣川（2019）は、小学校国語科の教材は多くが領域「言葉」との連続性が認められるが、幼児教育の視点から見ると国語科の活動は「意図的・計画的」であることを指摘している[31)]。

高橋他（2020）は、幼児同士の言葉による伝え合いは、「幼児の心のなかで他者に伝えたい気持ちが芽生えることが前提となる」こと、「共通に近いできる事柄が必要」であることを明らかにしている。また、「保育・幼児教育の時期に十分な言葉による伝え合いの経験を積むことができれば、就学期以降、さらに豊かな言葉による意思疎通の機会を得ることが容易になる」と述べており、児童が自身の気持ちを言葉で表現することは、小学校の教師の児童理解が進むことを指摘している[32)]。

片山他（2020）は、まず、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に見る言語能力の育成について整理しており、「あらゆる姿に言語能力の発達が影響を及ぼす」と述べており、言語能力の育成が小学校教育で活用されるべき、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿へとつながることを示している。そのうえで、「『振り返り』の場で用いる『言葉による伝え合い』に必要な会話スキルや、思考力や表現力、今後の見通しや目的を見いだす力は『学びに向かう力』として、小学校での生活や学習に繋がる姿とみなせる」と言葉による伝え合いの活動が小学校との接続に必要な力となることを指摘している[33)]。

また、渡邊（2020）は小学校との接続を研究目的にしていないものの、「幼児期に体を使って十分に活動し、様々な対象にかかわり、その体験を言葉や表現で振り返ることが、小学校教育に引き継がれ、小学校の授業を成り立たせる力へとつながっていく」ことを示唆している[34)]。

## 4．考察

### 1）保育活動における「言葉による伝え合い」に必要な要素

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の1つである「言葉による伝え合い」について文献調査をした結果、共通点を見出すことができた。

1つ目は、言葉による伝え合いを豊かにするためには、共通した体験の場が必要なことである。片山らは設定保育後の振り返りでは、全員が同じ経験をしていることで、友達の発言の状況や場面が比較的想像しやすく、共感したり、異なる考えを述べたりする姿が引き出されると述べている。加えて、古金の科学絵本の読み聞かせ

から、観察や体験活動へと繋げる活動や、高橋の言語表現活動（素話）と造形表現活動（描画）を繋げる活動は、活動はじめに同じ話を聞き、次の活動に繋げることで、話を聞いて気付いたことや感じたことを共通の話題として次の活動の中で言葉による伝え合いが可能になっている。また、河野らの話し合いでは、同じ遊びをしている友達同士での話し合い、チーム名やリレーの順番決めなど、共通の話題をもとに話し合いをすることで、次第に話し合いの進め方を身に付けている。さらに、吉村らも絵本の読み聞かせ後に保育者が問いかけることで、自分の気持ちや考えを自分の言葉で伝えようとする姿や自分の思いが伝わった喜びを感じる子どもの姿がみられることを明らかにしている。このことから、状況や場面が想像しやすい共通した体験は、子ども自身が感じたことを共有したい気持ちや、友達の発言に共感する気持ちや、異なる考えがあることを知ってもらいたいという気持ちが生まれることから、言葉による伝え合いが豊かになる活動の１つであると言える。

このように共通の体験を基にした言葉による伝え合いは、集団での活動場面において大いに発揮される。特に、共に協力して目標を目指す協同遊びでは、自分の思いを言葉にして伝えながら遊ぶことで、目標が達成できた時の満足感や充実感は増すと思われる。また、友達と協力することや同じ目標を持って遊ぶ経験は、集団の中の１人という自覚が生まれ、目標を達成することは、子どもの自信に繋がることである。このような集団の中の１人という自覚や自分に自信を持つ経験は、小学校での学習の基盤になるものだと考える。

２つ目は、保育者による適切なかかわりである。渡邉は、保育者が幼児と幼児の「中継者」としての役割を果たすこと、その他に、幼児が自分の思いを友達に伝えられる場を設定する「交通整理者」や「司会者」の役割をすることも必要であるとしている。また、河野らも、保育者が司会者の役割になることで子どもの言葉による伝え合いが育まれるとしている。

子ども同士が言葉による伝え合いをする中で、自分の思いが上手く伝わらず、葛藤を経験することもあると思われる。その際は、保育者が間に入りかかわることで、自分の気持ちを表現することの大切さ、伝わった時の嬉しさを経験することができると思われる。この経験の積み重ねは、子どもが自信を持つことにつながり、小学校へ入学後も友達と話をしたい、聞いてほしい、知りたいという気持ちが自然と生まれていくのではないかと考える。このような気持ちは、小学校での学びの基盤となり、小学校の教育につながる力であると言える。

言葉による伝え合いを豊かにするために必要な「共通した体験の場」と「保育者による適切なかかわり」の２つに共通して言えることは、子どもの心、気持ちが大切であるということである。

言葉による伝え合いが生まれる環境として、共通の話題を通じた体験が必要なのではなく、太田が述べている通り、心が揺さぶられる体験でなければならない。また、言葉による伝え合いに欠かせないのは伝える相手がいることである。活動を通して、自分の気持ちを伝えたい、疑問に思ったことを話したいという気持ちは安心して伝えることができる相手がいることが重要である。杉本が、日常生活における保育者と子どもとの信頼関係が重要であると述べている通り、保育者は子どもの言葉に丁寧に耳を傾け、子どもが聞いてほしい、伝えたいと思える存在でいること、また、幼児同士の関係を丁寧に観察し、必要に応じたかかわりをすることで子ども同士での言葉による伝え合いをより豊かなものにすること、さらに、クラスの一員として自己を発揮できる雰囲気をつくることが保育者には求められると考える。

### ２）小学校教育との接続に向けて

言葉による伝え合いは、小学校国語科の教材での繋がりが多くみられること、就学後の言葉による意思疎通を容易にすること、言葉による伝え合いに必要な会話スキル、思考力、表現力、今後の見通しや目的を見出す力は学びに向かう力として、小学校での生活や学習に繋がると指摘されている。以上のことから、幼児期の言葉による伝え合いは、小学校での学びの基盤になることが明らかになった。しかし、具体的な接続に関する研究は行われておらず、児童が実際にどのような場面で言葉による伝え合いの力を生かしているかについては明らかにならなかった。

また、小学校の国語科の学習と幼児の言葉による伝え合いは関連性が高いと言えるが、今回、調査対象とした文献では、国語科での具体的な学習内容を検討している研究がなく、その実際が明らかになっていない。さらに、廣川による、国語科では「意図的・計画的」な内容が多いとの指摘から、児童が主体的な気持ちを伝える場面が設けられているかが不明である。幼児期の学びの芽生えから児童期の自覚的な学びに移行していく中で、意図的・計画的な学習も必要であると考えられるが、これまで育んできた伝えたい気持ちを生かした学習方法も検討する必要があるのではないかと考える。

## 5．おわりに

本研究では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つである「言葉による伝え合い」を中心にした幼保小接続について、これまでの研究動向を探り、新たな研究課題を明らかにすることを目的に、文献調査を行った。その結果、子どもの気持ちが揺さぶられる友達との共通の体験とその気持ちを安心して伝えることができる人的環境が重要であること、また、言葉による伝え合いの経験は、小学校での学びの基盤になることが確認できた。

今後の新たな研究課題として、小学校国語科の学習内容と幼保小接続の観点からの研究動向を明らかにしていくことが必要である。小学校の学習内容の検討を行い、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識した計画について、分析を行うこと、幼児期の内容を踏まえた小学校教育の実践が行われているのか、幼保小接続を意識した小学校教育の取り組み実践について明らかにしていきたい。さらに、それらを踏まえて、効果的な幼保小接続のカリキュラムの検討を行っていきたいと考えている。

## 参考・引用文献


1）文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』
2）文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』
3）前掲注2）に同じ
4）文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』
5）文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説総則編』
6）文部科学省、国立教育政策研究所、教育課程研究センター（2015）『スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かるスタートカリキュラムスタートブック』
7）文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説生活編』
8）文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説生活編』
9）文部科学省「令和3年幼児教育実態調査」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/20221101-mxt_kouhou02-1.pdf（最終アクセス：2022年11月24日）
10）文部科学省「幼保小架け橋プログラム」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm（最終アクセス：2022年11月24日）
11）文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf（最終アクセス：2022年11月24日）
12）前掲注11）に同じ
13）前掲注2）に同じ
14）前掲注2）に同じ
15）前掲注2）に同じ
16）古金悦子（2018）「絵本を基点とした生命科学教育プログラムにおける『言葉による伝え合い』についての考察：保育内容『言葉』の領域から」、『松蔭大学紀要第23号』、pp127-136
17）太田顕子（2020）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿『言葉による伝え合い』に関する一考察」、『関西福祉科学大学紀要第24号』、pp39-46
18）渡邉輝美（2020）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿『言葉による伝え合い』についての一考察」、『初等教育：教育と実践第44号』、pp39-48
19）廣川加代子（2019）「領域『言葉』と小学校『国語科』の連続性の考察：言葉による伝え合いの視点から」、『新渡戸文化短期大学学術雑誌第9号』pp23-30
20）片山美香、西村華那（2020）「幼稚園における『言葉による伝え合い』の力を育む『振り返り』の時間の意義と課題」、『岡山大学大学院教育学研究科研究集録第175号』、pp1-12
21）高橋一夫、須増啓之、白波瀬達也（2020）「幼児同士の言葉による伝え合いを誘発する保育活動：素話から描画活動に繋ぐ保育活動における幼児の発話に注目して」、『神戸親和女子大学児童教育学研究第39号』pp175-191
22）前掲注16）に同じ
23）前掲注18）に同じ
24）前掲注21）に同じ
25）河野共芳、武田あさ子、牧野幸恵（2021）「幼児期の言葉による伝え合い：話し合い活動の実際」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第30号』、pp338-345
26）吉村真理子、上田和美（2022）「言葉による伝え合いから生まれる共感的理解:『ずーっと　ずっと　だいすきだよ』『きつねのおきゃくさま』読み語りの実践報告」、『千葉敬愛短期大学紀要第44号』、pp95-105
27）前掲注19）に同じ
28）前掲注17）に同じ
29）前掲注20）に同じ
30）杉本栄子（2021）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の『言葉による伝え合い』の一考察:幼児のコミュニケーション能力を高め、自分の思いを伝える力の育ちを促す活動を探る」、『びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要第13号』、pp145-154
31）前掲注19）に同じ
32）前掲注21）に同じ
33）前掲注20）に同じ
34）前掲注18）に同じ